

聖なる神の御母への冒涇とその具体的内容 ——プスコフ近郊メリョートヴォ教会壁画と中世ロシアの説教から

三 浦 清 美

Blasphemies against the Holy Mother of the God and their concrete details
— on the basis of analyses focused on the frescoes of Meryotovo church at a suburb
of Pskov and some examples from medieval Russian preaches

Kiyoharu MIURA

Abstract

The author in this bulletin provides a series of considerations on the characteristics of the blasphemies against the Holy Mother of God Maria (Богородица / Θεοτόκος) and attempts to demonstrate that in the Orthodox church such blasphemies against Maria originate from a distinctive thought of the Eastern Orthodoxy Theosis (θέωσις / обожение). Theosis is defined as: if Jesus Christ, notwithstanding His divine nature, became human, an ordinary human being can be divine and rather should be divine by imitating Jesus Christ with enormous efforts. According to the author, this thought of Theosis is essential to the eastern Orthodox church, though Western Catholic church, on the other hand, has taken suspicious rather than cautious attitudes to this Theosis as the destiny of the theologian Meister Eckhart showed. In the author's opinion Theosis, however, might belong to the essence of Christianity.

The paper consists of three parts. The first shows that the fresco of the Meryotovo church at a suburb of Pskov city, describing a pagan musician Skamarov who was blaspheming the Holy Mother of God, originates from “A tale of Skamarov” in the manuscript No. 270 of Chudov monastery collection, belonging to the Russian State Museum of History. The second part specifies the details of the blasphemies, which Skamarov was said to have made against Maria, but were not concretely described in his tale, by citing some examples from such medieval Russian literature as the preaches of Climent of Smolensk, Kievan metropolitan Ilarion and Kiril of Turov. The third part analyzes that such blasphemies could arise from general interests of the members of the Eastern Orthodox Church in a woman's body, which gave birth to human Jesus Christ, and such interests in the physical aspects of Maria was closely related to the thought of Theosis, by which people from the Orthodoxy world was confronted with the human nature of Jesus Christ and is characteristic nowadays of the Orthodoxy manner of religious thoughts.

1. プスコフ近郊メリョートヴォ教会壁画のスカマロフ像

エストニアとの国境に近いロシアの西の端にプスコフという古都がある。ビザンツ帝国の滅亡に際して、タールのくびきから脱したモスクワ大公国こそがビザンツの後継者になる、「モスクワこそが第3のローマである」という思想が生まれたが、この思想はここプスコフ出身の修道士フィロフェイが最初に唱えたものだった⁽¹⁾。この町の中心から東に42キロ離れたところ、ノヴゴロドをとってモスクワに向かう街道に沿いに、鄙びた村落メリョートヴォ村がある。この村の神の御母就寝教会【画像1】で、建築家で修復家のK. K. ロマー

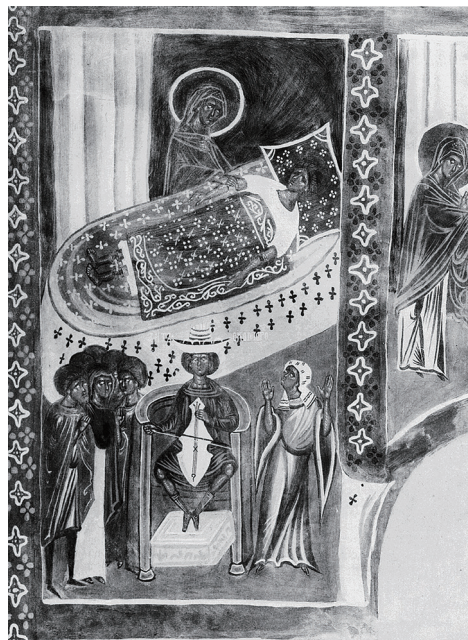
(1) 三浦清美『中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）』松籟社、2022年、264-287頁。



画像 1. メリョートヴォ教会 (Wikimedia commons)



画像 2. スカマロフ像
(武田一文氏撮影)



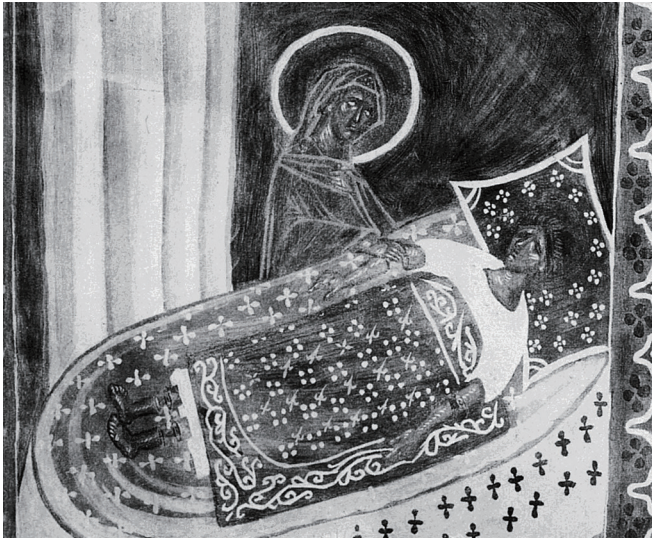
画像 3. スカマロフ像 (白黒)。注 11 の
論文からの引用。

ノフ教授が 1921 年に比較的保存状態のよいフレスコ壁画を発見した⁽²⁾。このフレスコ画はすぐに、『プスコフ第 1 年代記』の 1465 年の項で、「この年、メリョートヴォの聖なる神の御母の就寝教会の石の教会の壁画が描かれた」⁽³⁾と言及されているまさにその壁画であることが確認された【画像 2】。

このメリョートヴォ教会の壁画でもっとも学者たちの注目を集めたのがスカマロフ像である。画像を見てみることにしよう。ここでは、コンポジションがもっとはっきりした白黒の壁画を見ながら話を進めていきたい【画像 3】。この壁画は、上下二つの部分から成っている。上の部分には、寝台に横たわった人物が描かれている。横たわった人物は悲しみに打ちひしがれた様子をしている【画像 4】。下の部分は、真ん中に威風堂々と楽師が座ってチェロのような弦楽器を奏でている。向かってその左には男女からなる会衆がおり、その右には

(2) Романов К.К. Мелётово как источник истории Псковской земли // Проблемы истории докапиталистических обществ. М.; Л., 1934. № 9-10, С. 144.

(3) Псковские летописи. Вып. 1. С. 71.



画像 4. スカマロフ像上段



画像 5. スカマロフ像下段

困惑したようにも、驚いたようにも見える女性が手を広げて立っている【画像 5】。

ロマーノフはそもそも、この上下の画像を一つながりのものとは考えていなかった。というのは、上の寝台に横たわった人物には、髭がなく、中世ロシアでは、髭を生やすことが成人男子の倫理的義務であったため⁽⁴⁾、髭のないこの人物は女性であると考えられたからだ。弦楽器を奏でている人間は、その様子から男性であることを否定するのは難しい。また、この楽師の威厳ある様子はどうか。この威厳ある様子ゆえに、当初は楽器を携えたこの人物は王にして預言者のダビデではないかとも考えられていた。周知のとおり、正教会世界では、西欧教会の世界と異なり、教会での楽器の使用は厳しく制限されている。というよりも、ほとんど禁止されていたと言ってよい。このため、フレスコ、ミニアチュールなど教会美術で楽器をもって現れる人物は、決まって豎琴をもって詩篇を歌うダビデだった。この壁画が発見された当初、弦楽器をもっている人物はダビデではないかと考えられていた。

しかしながら、壁画のうえに塗られた漆喰が徹底的にはがされたあとの 1949 年の調査で、楽師の帽子の左右に文字が刻まれていることがはっきりした。ここには、向かって左側に「アント」、右側に「スカマロフ」⁽⁵⁾とたしかに書かれていた⁽⁶⁾。これは非常に大きな謎だった。スカマロフというのは、中世期のロシア正教会から蛇蝎視された異教楽師のことだ。それが非常に威厳をもった姿で描かれているのだ⁽⁷⁾。これは、中世ロシアにおいて教会壁画にスカマロフが描かれた唯一の作例だった。

この謎に一つの解決を与えたのは、長年にわたりロシア科学アカデミーロシア文学研究所の中世文学部門を主宰し、ゴルバチョフ政権下での思想的支柱となったドミートリイ・リハチョフ博士である。リハチョフはこの壁画のイメージソースを確定させ、壁画の上下は一つながりで、当初女性と思われていた上部の横たわった人物もスカマロフであることを明らかにした⁽⁸⁾。

(4) 自らの意志とは関係なく伸びる髭、髪、爪は神の領域に属すと見なされていたであると考えられる。

(5) 原語は «скоморох» 「スコモロフ」、その複数形は «скоморохи» 「スコモロヒ」となり、「異教楽師」を指す。学界では複数形「スコモロヒ」のほうが用語として流布している。しかしながら、メリョートヴォ教会壁画で描かれた楽師は 1 人なので、本稿では「スコモロフ」の語を採用する。

(6) Дмитриев Ю.Н. Мелетовские фрески и их значение для истории древнерусской литературы // Труды отдела древней русской литературы. М.;Л., 1951. Т.8. С. 410.

(7) リハチョフ博士はレニングラード・フィルの往年の名指揮者 E. A. ムラヴィンスキイに喩えておられたことを覚えている。

(8) Лихачев Д.С. Древнейшее русское изображение скомороха и его скомороха и его значение для истории скоморошества // Лихачев Д.С. Исследования по древнерусской литературе. Л., 1986. С. 353-357.

2. スカマロフ像のイメージソース

リハチョフが、メリョートヴォ教会スカマロフ像のイメージソースとして発見したのは、ロシア国立図書館（モスクワ）所蔵、三位一体セルギイ修道院集成 Ф. 304、37 番 181 葉-185 葉裏にある『リモニス』（後述）のテキストである。このテキストに現れた物語を要約すると、以下のようになる。

フェニキアのレバノンのエリヤという町にアンというスカマロフがいて、あらゆる馬鹿騒ぎの席で、聖なる神の御母を嘲り、罵っていた。あるとき、神の御母が彼に現れて罵るのをやめてほしいと頼んだ。スカマロフはこれを拒絶して、逆に神の御母を罵りはじめた。3度彼のもとに神の御母が現われて同じ懇願をしたが、スカマロフはいっそう激しく悪罵を繰り返すだけであった。

そんなある日、真昼にスカマロフが眠って休んでいると、神の御母が現われたのだが、このときばかりは何も言わず、彼に近づくと彼の両手両足を指で切るような動作をした。目が覚めてみると、スカマロフは手足を切り離されてころがっているのに気づいた。彼は自分が罰あたりな振舞いをしたためにどんなに苦しんだかをみんなのまえで話した。

【画像 5】が物語の前段にあたり、①人々が集まるさなかでスカマロフが神の御母を罵っていたことが示されている。【画像 4】が物語の後段にあたり、②横たわっている女性と思われた人物が男性のスカマロフであったこと、③神の御母が4度目にスカマロフのまえに現れ、手足を切る動作をしていること、実際に手足が切れていることが示されている。以上のことが、画像とテキストで一致していることがわかる。ここまでが 1990 年代までに分かっていたことである。

ここで若干私事にわたることを語るのをお許しいただきたい。筆者は 1990 年、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』を題材にした修士論文を書いて東京大学大学院人文科学研究科（スラヴ語スラヴ文学専攻）に受理され、その後、博士課程に進学して、1992 年秋から 1993 年にかけて、帝政時代の研究の遺産が残るサンクト・ペテルブルグに留学していた。『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の研究に行き詰まりを感じていた筆者は、キリスト教受容が 10 世紀末と非常に遅かった古代ルーシ⁽⁹⁾におけるキリスト教と異教の確執に研究テーマの方向修正をしていた。あらたに研究対象に選んだのは、「Слово святого Григория (Богословца) изобрѣтено в толцѣх о том, како първое погани суще языци кланялися идолом и требы им клали. то и нынѣ творят»「注釈に見いだされる聖グレゴリオスの講話。初期の異教徒が偶像に跪拝し、捧げ物を備えていたが、いまでもそれを行っていること」という、専門家以外は誰も知らないような小さな作品で、プスコフで作成されたことが明らかな НСРК 集成写本に基づいてテキスト分析を行っていた。同じ作品がモスクワの歴史博物館に所蔵されているチュードフ修道院集成 270 番という写本のなかにあることを知り、留学期間も終わり間近な 1993 年の晩秋、夜汽車でペテルブルグからモスクワに赴いた。この写本のなかで、先の『グレゴリオス講話』のほかに、キリスト教と異教の葛藤というテーマに関連しそうな作品を、時間の許す限り片っ端から転記していった。そのなかにこの『スカマロフについての講話』という作品があった。ペテルブルグに帰ってから、その筆写記録をロシア文学研究所の上級研究員、アレクサンドル・ボブロフ博士に見せると、これは大きな発見だということになった。

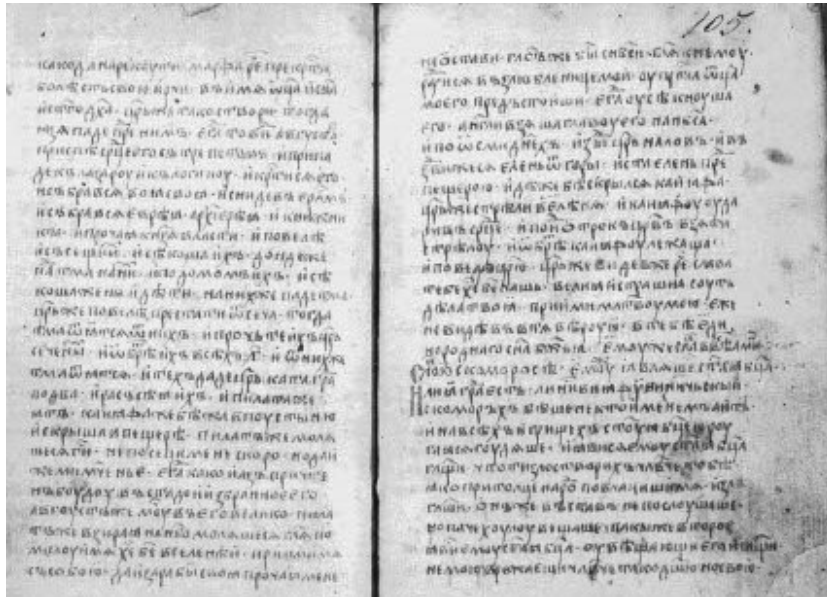
以下にチュードフ 270 番写本のテキストを示す【画像 6】。

«Слово о скоморосѣ, емуже являшеся святая Богородица.»

Илия град есть, Линисивия Фувиничьскыи, скосорьхъ бѣше некто именемъ Аить. И на всѣхъ игрищехъ святую Богородицею ругаяся, гудяше.

И явися ему святая Богородица, глаголющи: «Что ти зло створишь, человекъ, тобѣ, яко при толще народа повлаиши мя и злѣ глаголеши?» Онъ же, въставъ, не послушаше, но паче хулу вещаше. Паки

(9) Древняя Русь のこと。中世ロシアとも言われる。



画像6. チュードフ修道院写本集成 270 番。注 11 の論文からの引用。

же второе явися ему святая Богородица, увѣщаючи его и глаголющи: «Не мою врежаеши, человекъ, тако душу, но свою». Се же пакы злѣ хуляша ю. И она пакы трѣтее явися ему, то же глаголющи и увѣщаючи. И якоже не остана, но паче хуляше.

Въ единъ же от днии, полудени яко, лежаще на одр своемъ, и явися ему, ничтоже рекши, но токмо и перстомъ своимъ начертъ обѣ руцѣ и нозѣ обѣ. И възбудивша от сна, обрѣтша отсеченъ имыи руцѣ и обѣ нозѣ. И трупъ обрѣтеша лежа.

О сих же зловивыи исповѣдашеся всѣмъ, еже ся есть створило ему, иже похулениемъ своимъ пострада и человекѣлюбия владычица наша Богородица не послуша. Богу же нашему слава в вѣк. Аминь.

次にこの中世ロシア語テキストの日本語訳を示す。

聖なる神の御母が現れたスカマロフについての講話

フェニキアのリニシャヴィア（レバノン地方）にエリヤという町があり、アイトというスカマロフが住んでいた。このスカマロフはグドークを奏でながら、あらゆる演目で聖なる神の御母を罵っていた。

するとあるとき、聖なる神の御母が彼に現れてこう言った。「人間よ、私はそなたにどんな悪事を働いたというのですか？そなたはみんなのまえで私に悪罵を投げかけ、意地悪いことを言い募っているのですから。」スカマロフは立ち上がり、言うことを聞かずに、さらに誹謗の言葉を言い立てた。ふたたび聖なる神の御母が彼のまえに現れて、彼を説き伏せようとしてこう言った。「人間よ、そなたは私の魂ではなく、そなた自身の魂を損なっているのですよ。」しかし、かれはふたたび意地悪く神の御母を罵りつづけた。そして、神の御母は3度目にスカマロフに現われて、同じことを言い、彼を説得しようとした。

しかし、彼は悪罵を止めようとせず、もっと激しく神の御母を罵りはじめた。そうした日々のある日、昼日中にスカマロフが自分の寝台に横たわっていると、神の御母が彼のまえに現れて、何も言わずに自分の指で彼の両手、両足に線を引く仕草をした。眠りから覚めてみると、人々はスカマロフの両手両足が切断されているのを発見した。その身体は地に投げ出されていた。

この意地悪な男はみなに、自分の身に起こったことについて、自分の誹謗によって苦しみを受け、我々が人間を愛する女主人、神の御母の言うことを聞かなかったことを悔悛して、この話をしたのである。我々が神に永劫に誉れあれ。

アーメン。

発見とは、この写本の『スカマロフについての講話』のディテールの検討から、メリョートヴォ教会壁画のスカマロフ像のイメージソースが、まさにこのチュードフ修道院 270 番であることが明らかになったことである。そのディテールは、太字で示した3点である。

第一に、「アント」であると思われていたスカマロフの名前が「アイト」だったことである。Ю. Н. ドミートリエフによって壁画の文字から「アント」とされ、『リモニス』テキストからリハチョフによって「アン」とされていたスカマロフの名前が、チュードフ 270 番写本によって「アイト」であることがわかった【画像 7】。一方、壁画の文字列は АНТЬ と見え、2 番目の文字 Н は現代語ならば «n» 音だが、15 世紀のロシアでは、«n» 音ならば N（真ん中の横線が向かって左縦線の上部分から向かって右縦線の下部分へ延びる）と書き、Н（真ん中の横線が向かって左の縦線の真ん中部分から発し、向かって右の縦線の真ん中部分に到る、横線は縦線に対してほぼ垂直である）と書かれた文字は «i» 音であるケースが多いため、スカマロフの名前は「Аитьアイト」であると結論づけられた。この名前はギリシア語の「αἴτιος アイティオス、咎ある」に由来する。つまり、チュードフ写本テキストの名前とメリョートヴォ教会壁画のスカマロフの性格は一致するのだ。

第二に、「楽器を奏でて」という細部である。『リモニス』テキストでは「кужаше 嘲りながら」という単語だったのが、チュードフ写本テキストでは「гудяше グドークを奏でながら」に変わっている。グドークは、中世ロシアで用いられた弦楽器で通常、弓で弾いた【画像 8】【画像 9】。



画像 7. アイト (АИТЬ) の文字。注 11 の論文からの引用。



画像 8. グドークと演奏者
(Wikimedia commons)



画像 9. グドーク
(Wikimedia commons)



画像 10. ロシア科学アカデミーロシア文学研究所定例研究会
(1993 年 12 月 20 日)

第三に、チュードフ写本テキストでは、『リモニス』テキストではなかった「寝台に横たわっている」というディテールが加わっているが、このディテールも壁画と一致する。

チュードフ修道院集成 270 番は、その言語的特徴から言語学者 H. M. カリンスキイがプスコフ起源であることをすでに論証していた⁽¹⁰⁾。プスコフで制作されたこの写本をイメージソースとして、1465 年にメリョートヴォ教会壁画のスカマロフ像が描かれたという結論が得られた。筆者は 1993 年 12 月 20 日、ロシア科学アカデミーロシア文学研究所の定例研究会でこの発見を報告することが許された【画像 10】。そこには、リハチョフ博士も臨席されていた。外国から来た未成熟の学徒に、こういうチャンスを与えてくれたロシアという国の懐の深さに、私はいまでも言いようのない深い感謝の念をもっている。その後、この研究成果はボブロフ博士との共著で 2015 年に出版された⁽¹¹⁾。

3. スモレンスク人クリメントの説教

以上を受けてここでは、スカマロフ、アイトがいったい神の御母に対して具体的にいかなる誹謗中傷を行っていたかという問題を提起し、以下において実証的に考えてゆきたい。あわせて神の御母の身体性に対する強烈な関心が、西方カトリック教会との比較において、東方正教会、ことにそれに属するロシア正教会の大きな特徴であったことについて述べ、神の御母に対するこうした誹謗中傷の精神的基盤について考えたい。

『スカマロフについての講話』の原典はギリシア語で、6 世紀から 7 世紀にかけて活動したビザンツの文筆家ヨハネス・モスコスによる『リモニス (リモナリイ) Лимонис / Лимонарий』に収められている。『リモニス』のギリシア語原語は «λειμώνάριον» で、この語は「牧草地 «λειμών»」に由来する。スラヴ語訳では、『霊の牧草地 Луг духовный』と訳されることもある。『シナイ聖者列伝 Синайский патерик』は、その大半の作品が『リモニス』由来のもので、『リモニス』の重種とも言える。そのほかに『新しい天国』の呼称もある⁽¹²⁾。

この作品は、9 世紀にスラヴ人の使徒聖メトディオスによってブルガリアでスラヴ語に翻訳され、そこからロシアに伝わった。レバノンのフェニキア都市エリヤでの出来事が題材なので、それがビザンツ、ブルガリアを経由してロシアにもたらされたことになる。パレスチナから北辺のロシアまでこの話が正教圏を伝わる過程で、たとえば楽器グドークの使用など幾分かロシア化はなされているが、基本的にはもとの話型がほとんど

(10) Каринский Н.М. Язык Пскова и его области в XV в. СПб., 1909. С.96-109.

(11) Бобров А.Г., Миура К. Литературный источник Мелётовской фрески // ТОДРЛ. Т. 63. СПб., 2015. С.485-498.

(12) Иоанн Мосх // Православная энциклопедия.

そっくりそのまま保たれた。このことは、パレスチナ、ビザンツ、南スラヴ、ロシアまで非常に広い範囲で、聖なる神の御母マリアへの冒涇が、修正、是正を要す喫緊の課題として存在したことを示している。

神の御母へのこうした冒涇的言辭の具体的な内容はどのようなものだったかを考える鍵は、12世紀後半の中世ロシアの文筆家、スモレンスク人クリメントの説教にある。スモレンスク人クリメントは、12世紀半ばにルーシ出身者ながら、ルーシにおける聖職者の筆頭の地位であるキエフ府主教に昇りつめた人物である。モンゴルの侵寇以前のルーシにおける府主教は26人を数えるが、そのなかで、ルーシ出身者でなおかつ府主教となったのは、11世紀ヤロスラフ賢公治下のイラリオンとこのスモレンスク人クリメントだけで、それ以外の者の出自はみなギリシア、ビザンツにあった。クリメントはコンスタンティノープル総主教の祝福なしで、主教たちの宗務会議の決定によって府主教に登りつめた。『イパーチイ年代記』が伝えるところによれば、それは1147年、ウラジーミル・モノマフの孫、キエフ大公イジャスラフ・ムスチスラヴィチの治世での出来事だった。

年代記が伝えるところによると、府主教クリメントは「多くの著作を書き、伝えた」とされているが、司祭フォマーへの書簡は、現在まで伝わっている唯一の彼の著作である。年代記は、スモレンスク人クリメントを「ルーシではかつてないほどの書物の人であり、知を愛する人」であったとしているが、彼の書簡はこの性格づけが根拠のないものではなかったことを示している。この書簡は、クリメントが自分の学識をひけらかしていると論難していたスモレンスクの司祭フォマーに答えて、キリスト教徒の精神の涵養のためには、それらを習得することが必要であると証明している。クリメントはフォマーの神経を逆なでするのをものともせず、この書簡に、聖なる書物のテキストのアレゴリー的な解釈をこれでもかこれでもかと洪水のように流しこんでいる。

4. 二つの旧約聖書エピソード—ユダとタマル、モアブ人ルツ

知識のひけらかしを非難されたクリメントが、キリスト教を護るために是非とも必要な知識であると主張して、その例として挙げているのが、ユダ⁽¹³⁾とタマルのあいだに生まれた双子ゼラとペレツの出生譚と、ルツについての弁論の二つである。ユダ、タマル、ゼラ、ペレツ、ルツはいずれも旧約聖書『創世記』の登場人物で、クリメントの説教の言葉を借りれば、「神の御母マリアをとおして繋がるイエス・キリストの祖先」だった⁽¹⁴⁾。

ペレツとゼラという双子の出生譚は、以下のとおりである。タマルは、ユダの長男エルと結婚したが、エルと死別したので、ユダヤ人のレビレート婚⁽¹⁵⁾の習慣によって、次男オナンに嫁した。しかし、オナンはこれをおもしろくなく思い、タマルと関係をもつたび、精液を地面に流したため、これを怒った神によって殺された。ちなみにこの人物の名はオナニーという語の語源となっている。タマルは三男のシェラの妻となる権利をもっていたが、シェラが二人の兄と同じ運命をたどることを恐れた舅のユダによって、生みの父のもとに返された。そこで、タマルは一計を案じた。舅のユダが近くを訪ねてくることを聞きつけると、タマルは娼婦の姿をしてユダを誘惑し、ユダの子供を妊娠したのである。その結果、生まれたのが双子のペレツとゼラだった⁽¹⁶⁾。

(13) アブラハムの孫であるヤコブとレアの子で、イスラエル12土族の一つであるユダ族の祖となった。

(14) 「福音書作者は書いています。『ユダはタマルによってペレツとザラを生み、ペレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、アラムはアミナダブを、アミナダブはナフションを、ナフションはサルモンを、サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、エッサイはダビデ王をもうけた。』」三浦清美『中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）』松籟社、2022年、97頁。「ダビデの息子、ナタンの膝からは、レフギヤがメルヒヤとパンフィールを生み、パンフィールがいわゆるヴァルパイフィールを生み、ヴァルパイフィールがヨアキムを生み、ヨアキムが聖なる神の御母を生んだのです。」上掲書98頁。「ヨアキムが妻に娶ったのは、清らかで賞賛に値するアンナであり、このアンナからいと清らかなる乙女、我らが神の御母なる女主人、永遠の処女、ダビデの家系に連なるマリアが生まれ、そのマリアから我らが真実の神、キリストが生まれたのでした。もしもマリアがダビデの血統に連なるのなら、キリストがダビデの血統であることは明らかであり、もしもダビデの血統に連なるのなら、それはつまり、ペレツにも血筋がつながり、ペレツに血筋に連なるのなら、我らの主は、聖なる福音書の述べるとおり、ユダの膝からの生まれに輝くのです。」上掲書98頁。

(15) 弟が亡兄の身代わりとなってその妻をめとる婚姻形態。レビレート//『世界大百科事典 Ver. 10』日立デジタル平凡社、1998年。

(16) 『創世記』38章。以下、聖書の引用は『新共同訳』に拠る。

クリメントはこのエピソードを『創世記』テキストを忠実になぞって語りなおしたあとで、こう述べてユダとタマルのいわば「淫行」を弁護している。

このことについて、誹謗中傷しながら考えを巡らせる者たちもいます。彼らはザラとペレツのことを思い出して、彼らが淫行から生まれたと言っています。いいえ、彼らは断じて淫行から生まれたものではありません。神のご配慮によって生まれたのです。ユダの最初の子が生まれたあとも、二人目の子が生まれたあとも、タマルは肉体の交わりなしでいたのでありましょうか。最初の交わりによって妊娠したときよりも、タマルは子宮に子を孕むことが楽になっていたことでしょうか。しかしながら、彼女は子を生む代わりに、自分の子宮のなかに不妊の縛りを引き受けたのです。そして、このようにして最初の交わりで不妊の縛りは解かれ、懐妊し、神たる誉れ高いあの果実たちを生んだのでした。⁽¹⁷⁾

つまり、ユダとタマルの子孫である神の御母には、先祖の淫行の所産だという冒涇的言辭が付きまとい、スモレンスク人クリメントはこれに懸命に抗っていたことがわかる。これに続けてクリメントは、ダビデ王の曾祖母であるルツについて話を進める。

言葉が溢れているにもかかわらず、私は福なるルツのことを言わないですませることはできません。なぜなら、この女は非難にさらされているからです。神の書物はこの女を非難せず、称賛さえしています。というのは、この女は律法に則った結婚をするまえにボアズと結ばれましたが、寡婦で、そのうえ、モアブ人であり、このように彼女は懐妊し、ダビデにとって祖父にあたるオベドを生んだのでした。⁽¹⁸⁾

実は、『創世記』によれば、ルツの祖先モアブの出生譚についても、同じような「淫行」の論難を引き起こす火種がある。アブラハムの甥のロトはソドムの住民だったが、その罪ゆえに硫黄の火が降りソドムが焼き尽くされて滅亡するとき、アブラハムの執り成しで妻と二人の娘とともにソドムからツァオルへと逃れた。神はロト一行に振りかえることを禁じていたが、ロトの妻は振り返ったため塩の柱になった。ロトと二人の娘たちは山のなかに逃れた。夫を失った二人の娘たちは、妻を亡くして寂しい思いをしている父親のロトにぶどう酒を飲ませ、子種をもらうために床を共にした。姉は息子モアブ（「父親より」の意）、妹は息子ベン・アミ（「私の肉親の子」の意）を生んだ。モアブはモアブ人の祖先となり、ベン・アミはアンモン人の祖先となった⁽¹⁹⁾。このエピソードは、ロトが犯した償いがたい罪（近親相姦）として、トゥーロフのキリルの説教⁽²⁰⁾でも、アポクリファの『十字架の木についての講話』でも論^{あげつら}われている⁽²¹⁾。ルツにもやはり「淫行」の拳句の子孫であるという誹りがあったことがわかる。

このほか東スラヴ人で最初のキエフ府主教イラリオンの説教『律法と恩寵について』でも、次のように言われている。

あの者ら⁽²²⁾はこの方⁽²³⁾を詐欺師と名づけ、淫蕩な行いから生まれたと誹謗し、ベルゼブルの力によって悪霊を追いだしたと言いました。

ここでもイエス・キリストは淫蕩な行いで生まれた子として非難されていたことが窺われる。また、12 世

(17) 三浦清美『中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）』松籟社、2022 年、100 頁。

(18) 上掲書 101-103 頁。

(19) 『創世記』19 章 30-38 節。

(20) 三浦清美『中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）』松籟社、2022 年、162 頁。

(21) 三浦清美「中世ロシア文学図書館（IV）アポクリファ①」『電気通信大学紀要』25 巻 1 号、2013 年、65-70 頁。

(22) ユダヤ人のこと。

(23) イエス・キリストのこと。

紀ビザンツの創作『受難するキリスト』でも神の御母に対する同様の誹謗が見出される²⁴⁾。これらのことから、聖なる神の御母マリアへの誹謗の具体的な内容は、処女としてイエス・キリストを懐妊したとされる神の御母マリアに、不倫、婚外性交渉の疑惑を突きつけるものであり、神の御母マリアを性的に放縦な女性であると決めつける冒涇的言辞にあったこと、それは楽器の演奏を伴う演劇的性格をもったものであったこと、こうした神の御母への誹謗はパレスチナからロシアまでの東方正教会圏でかなり頻繁に行われたこと、それに対して教会知識人が正面から愚直に反論を繰り返してしていたことがわかる。

5. 神の御母の聖なる身体

メリョートヴォ教会壁画、そのイメージソースとなった「スカマロフについての講話」、スモレンスク人クリメントの説教、キエフ府主教イラリオンの説教、『十字架の木についての講話』は、こうした聖なる神の御母への冒涇に対する教会の戦いの痕跡だった。しかしながら、神の御母が「人間」であるとするならば、人間である神の御母マリアに人々が「性の欲求」を見出したとしても、それはごく自然な流れであるとも考えられる。

無論、このことは、教会がそのような抑制と慎みを欠いた奔放な思考を肯定していたということを意味するものではない。それは、『スカマロフについての講話』のように、そのような冒涇的な誹謗を行った人物が厳しく罰されるという筋立てをもつ作品が、教会の枠内で作成され、流布していたことから容易に推察することができる。神の御母マリアは人間であったとしても、ふつうの人間を超えた特別な範疇に属する唯一無二の存在であると見なされていた。このことは、例えば、『聖母マリア被昇天』²⁵⁾のような説話を読めば一目瞭然である。この説話では、雷鳴とともに白い雲が降り、宣教に従事していた使徒たちは神の御母マリアのもとに連れてゆかれ、神の御母の就寝（臨終）に立ち会う。このような「奇跡」を起こすことができる神の御母という「人間」は、やはりふつうの人間の範疇を超えた特別な「人間」であった。

とはいうものの、このように神の御母が特別な範疇に属する「人間」であることはたしかであったとしても、その一方で、神の御母があくまで人間であることも揺るぎない「真実」なのである。私たちはこのことのまゝに立ち止まりたい。どんなに苦々しく受け止めていたとしても、教会は、神の御母が性的に放縦な女性であったという誹謗を最終的に根絶やしにすることができなかつたし、それどころか、そのような冒涇的な発想は一般信者のなかからどこからともなく湧き上がってきた。教会はそれを抑止するすべを知らなかつた。そのような発想が湧いて出てくる根底には、東方正教会が西方カトリック教会に比べて、「神の人間化」という「真実」とより真摯に向き合おうとしたという現実があった。イエス・キリストは、神でありながら同時に人間である。この点については、東方正教会も西方カトリック教会もまったく変わりはない。しかしながら、東方正教会はイエス・キリストはまた人間でもあるという「真実」に、西方教会とは比べものにならぬほど真っ向から向き合ってきたのではなかつたかと、筆者には思われてならない。

イエス・キリストが人間であるならば、人間であるイエスを生んだ神の御母マリアはなおさらに人間である。マリアの正統的な呼び名はまさに「生神女＝神を生んだ者 Богородица / Θεοτόκος」であり、東方正教会の文学作品では、神の御母マリアが神聖であることを述べるさい、その豊かな身体性が強調され、子を産む女性の機能的な側面が、「保健体育」的な記述によって前景化することがけっして珍しくなかつた。たとえば、ポクロフ（神の御母の庇護）という祝日²⁶⁾の由来を記した、「神の御母の庇護に寄せる物語と講話」という14世紀に書かれた説教では、次のように神の御母が讃えられている。

なぜなら、ケルビムたちとセラフィムたちが見ることが叶わなくても、畏怖の念をもって聖なる讃め歌

24) 三浦清美『中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）』松籟社、2022年、186-187頁、注425。

25) 『黄金伝説三』人文書院、1985年、188-189頁。

26) 神の御母庇護（ポクロフ）の祝日は、10月1日（グレゴリオ暦10月14日）である。この祝日は、ビザンツの教会暦にはない。12世紀後半、アンドレイ・ボゴリュプスキイ公のもとで、北東ルーシで制定され、それがモスクワ大公国、ロシアに受け継がれた。三浦清美『ロシアの思考回路』扶桑社、2022年、111-113頁。

を捧げてくださるそのお方⁽²⁷⁾は、淨くいと清らかなるその御母が、自らの清き尊き御腕で抱き取ってくださるからである。天が住まわせることが叶わなかったそのお方は、神にとって快き神の御母の子宮が難なく住まわせてくださるからである。⁽²⁸⁾

ここでは、神の御母の「子宮」が神が人間となったイエス・キリストを「住ませ」、その「御腕」が幼子イエスを「抱き取る」のである。以上の部分に続くのが以下である。

万物の創造主は処女を蹂躪することなく通り過ぎた。乙女は清らかなままで、出産のときにも乙女は清らかなままに保たれ、その処女性は純潔なままだったのである。⁽²⁹⁾

「処女を蹂躪することなく通り過ぎる」のは、いうまでもなく、人間であるイエス・キリストである。どこを通り過ぎるのかと言えば、それは「産道」にほかならない。さらにこの一節は次のように続いていく。

もしも天使の知恵をもってしても、それにふさわしい讃仰の言葉によって、天なる父が讃え聖霊が守り神の息子が朽ちることなく通ってきたその乙女を讃えることができないというのなら、本性より以上の、人間の本性よりも天使の理性よりも高い秘蹟が起こったということである。⁽³⁰⁾

ここでも、「神の息子が朽ちることなく通ってきた」というように、子を産む女性の身体的部位が示されている。それはまさしく中学生が受ける保健体育の授業のようである。筆者は、それを露骨で品がないとは見ない。むしろそこにあるのは、子を産むという女性の身体の神秘と愚直なほど正面から向き合おうとするあくなき意志である。なぜなら、神の御母は人間にほかならない以上、信仰に篤い者は神の御母が人間たることに正面から向き合わなくてはならないからである。ここにも、東方正教会特有のテオシスを認めることができる

と筆者は考える。

中世期の東方正教会が、以上のように、たしかに神の御母マリアの身体の神秘に執拗な関心を抱いていたのは確かであるが、その一方で同時に、そうした関心が民衆において突出し、カルケドン信仰箇条の本来のかたちを歪める可能性があることに深刻な危機感を抱いてもいた。神の御母マリアの身体性への民衆の過度の関心に対して、教会が警戒的な態度を取っていたことを証言するものが、クイントセクストゥス公会議⁽³¹⁾規定 79 条である。ここでは、「至聖なる神の御母の集い」という名の民衆に親しまれた教会の祝日が論難の対象となっている。「至聖なる神の御母の集い」とは、キリスト生誕祭の翌日の祝いのことで、出産した神の御母マリアをいたわるために、麦を原材料とする食品を聖堂に持ち寄る習慣をあった。規定 79 条で、教会はこの民衆の習慣を禁止しようとしている。以下に引用するのは、クイントセクストゥス公会議規定 79 条を継承したリャザン・コルムチャヤのテキストである。

(27) イエス・キリストのこと。

(28) Слово похвальное честному Покрову пресвятой Владычицы нашей Богородицы и Приснодевы Марии. Творение смиренного иеромонаха Пахомия (*Подготовка текста, перевод и комментарии М.А. Федотовой*) // Библиотека литературы Древней Руси. Т. 12. С. 56-59. この作品には邦訳がある。三浦清美「中世ロシア文学図書館 (XX) 佯狂者アンドレイ伝 (完結) 曆聖者伝 10 月 1 日ポクロフについての講話」Waseda RILAS Journal 8, 2020, 308-311 頁。なお該当部分は 310 頁だが、翻訳の補正を行っている。注 (29) についても同様にである。

(29) 同上。

(30) 同上。

(31) 691 年から 692 年にかけてユスティニアヌス 2 世によって開催された公会議で、第 5 回 (553 年)、第 6 回 (680-681) 全地公会の補完をするというその使命ゆえに、しばしば「クイントセクストゥス (5-6 回)」と呼ばれている。また、議場となった宮殿 (蝸牛＝トゥルロの間) にちなんでトゥルロ公会議と呼ばれることもある。第 5 回公会議、第 6 回公会議は異端問題の解決のために開催されたが、教義の問題を論ずることに終始し、規範は何一つ決議しなかったのに対し、クイントセクストゥス公会議は教会、社会生活の規則を採択した。そのなかには、魔術、占い、占星術に関する規則 (61 条、62 条、65 条) などが含まれている。

キリスト降誕ののち聖母の祝日にお産のお祝いといって麦粉を煮たり、そのほかの料理をつくる者は、破門されるべきである。

注釈。これは、永遠の処女、神の御母に対する尊崇の心ではないからである。神の御母の肉への宿りは、私たち人間の本性にならい、ほかのふつうの女の誕生の場合と同じように理解することはできず、知を超え言葉を超えたものだからである。同様に、玄妙なるその生誕について物語ることも何かをなすこともできないからである。このために、誰かがキリスト降誕祭の翌朝に、至純なる処女なる御母のためにその出産のあとに、麦粉やその他のものを煮たり、それをほかの人々に配ったりしたならば、それが寺男や堂務者ならば追放されるべきであるし、世俗の人間ならば容赦なく破門されるべきである。なぜなら、神の降誕は処女からであり、懐胎は受精によるものではないと教えられているからである。⁽³²⁾

そもそも中世東方正教会の民衆には、妊婦が出産したときに、出産の労苦を労わるために、その産婦に麦の練り粉を与える習慣があった。この習慣を神の御母マリアに適用したものが「至聖なる神の御母の集い」という祝日である。この祝日について、ガリコフスキイは次のように述べている。

神の御母がロージャニツァと混同されるようになったのち、出産を終えたばかりの女性として神の御母を崇拝する習慣が生じ、この混同のために、神の御母が出産の助け手と見なされるようになった。⁽³³⁾

ガリコフスキイは、この祝日が20世紀初頭にどのように祝われていたのかを次のように描き出している。

小ロシア（ウクライナ―筆者注）では、今日にいたるまでこの日（12月26日）に聖堂にパンやピロークなどを持ち寄る。これらの捧げ物は、それらをまえにして短い全体向けの追善式がおこなわれたあとに、聖職者たちの収入に繰り入れられた。この習慣は南ロシアからモルダヴィアにもたらされた。この習慣が定着すると、出産の苦悶の表情を湛えた神の御母と幼子である救世主を取り上げた産婆の描かれたイコンの図像が現れた【画像11】⁽³⁴⁾。このイメージは子供を取り上げる産婆への祈りのなかに取り込まれた。「主よ、イエス・キリストよ、われらが神よ、世の始まりに父より生まれ、女の手で襁褓に包まれた方よ。」ヴォルニニ県では、「神の御母の帷」のためにお祝いをする習慣が存在しており、それは12月26日の「神の御母の集いの日」におこなわれることになっていた。キリスト降誕祭の二日目に、女性たちは教会にパン、ピロークその他のものをもって行くのであるが、それは土地の言葉では「お産の神の御母のところに行く」と呼ばれていた。⁽³⁵⁾

この聖母の祝日は、東方正教会の世界（オイクメネー）全体に広



画像11. 産褥の苦しみの表情を浮かべる神の御母。Рождество богородицы // Государственная третьяковская галерея. Т. 1. Древнерусское искусство X-начало XV века. М., 1995. С. 79.

⁽³²⁾ Рязанская кормчая (1984). РНБ, Ф.п.П.№1, Толстовской библиотеки, I, №311, Л.159-159об. このテキストに刊本はなく、写本からの直接引用である。

⁽³³⁾ Гальковский Н.М. Борьба Христианства с остатками язычества в Древней Руси. Т. 1. Харьков. 1916. С. 169.

⁽³⁴⁾ そうしたイコンの一つとして、14世紀ノヴゴロドで描かれた以下のイコンがある。20. Рождество богородицы // Государственная третьяковская галерея. Т. 1. Древнерусское искусство X-начало XV века. М., 1995. С. 79. 以上は筆者による注。

⁽³⁵⁾ Гальковский Борьба христианства. Т. 1. С.168.

がっており、教会暦（メシャツェスロフ）においてはさまざまに名づけられている。たとえば、「シュナクシス＝聖母の集い」、「エピロケイア＝出産祝い」、「エジプトへの逃避」などの名称があり、1295年の韻文教会暦（プロローグ）においては、これらの名称が併記されている。1250年のプロローグによれば、「現在、ツァリグラード（コンスタンティノープル）では、ウラケルナイ教会において祝われている」と述べられている³⁶⁾。『セルギイ・スパスキの教会暦』によれば、「至聖なる神の御母の集い」の祝日は、たとえば、715年のシナイ福音書、クリプトフェラト修道院の11-13世紀のギリシア語暦聖者伝（ミネイ）、12世紀のスラヴ語典礼暦年代記に言及されている³⁷⁾。中世ロシアにおいても、とくに南部で、聖母の母胎の安寧と出産の無事とを祝う習慣が「聖母の帷」の名のもとに知られ、12月26日に祝われていた。

産婦としての神の御母マリアを労わろうとする中世民衆の優しい心根と、神の御母を多情でふしだらな女性とする誹謗とは、神の御母に通常の女性を見るという点で共通しており、思いやりと誹謗という相反するように見えるものがじつは非常に近接したところにあったということが窺われる。

6. テオーシスの発露としての冒瀆的誹謗

カルケドン信仰箇条によれば、イエス・キリストは「真の神であり、同時に真の人間である」と規定されているが、東方キリスト教、ことにロシア正教においては、この信仰箇条に依拠して、「神化（テオーシス θεώσις theosis, обожение）」の観念が発達した。ハリストス正教会では、このテオーシスに「神成」の訳語を当てている。テオーシスとは何かを明確に規定したのは、大アファナシオス（295-373）である。大アファナシオスは、その論文『言（ロゴス）の受肉』において、次のように述べている。

実に、この方〔言（ロゴス）〕が人となられたのは、われわれを神とするためである。また、この方〔言（ロゴス）〕が肉体をとおしてご自分を現されたのは、見えない父の認識をわれわれが得るためである。また、この方〔言（ロゴス）〕が人々の侮辱を耐え忍ばれたのは、われわれが不滅を受け継ぐためである。この方〔言（ロゴス）〕は、苦しみえぬ方、朽ちざる方、言（ロゴス）そのものである神として、いかなる点でも損なわれることのない方であったが、人々のためにこれらの苦悩を耐え忍ばれたのであり、ご自分の受苦不能性によって人々を守り、救われたのである。³⁸⁾

テオーシスとは、イエス・キリストにおいて神が人間になられた以上、すべての人間には神になる可能性が開かれたし、そのための努力を惜しんではならないという考え方である。一神教のなかで、ユダヤ教もイスラームもイエス・キリストの神性を認めないから、テオーシス、すなわち、「（神の）人間化の認識」、「受肉、受苦、復活」、「（人間の）神化」こそがキリスト教の核心部分であるとも考えることができるのだが、にもかかわらず、西方キリスト教においては、この思考回路、すなわち、テオーシスが、アリストテレスの哲学的な方法論の導入とスコラ哲学の発展とともに後退し、最終的には、公的な教義からは駆逐されてしまう。このことを端的に示すのは、西方キリスト教における「神化」思想の担い手であった、マイスター・エックハルトの運命であろう。ローマ教皇庁はエックハルトを異端として論難し、その著書は公刊ならびに講読が禁止された³⁹⁾。

しかしながら、東方正教会においては、状況がまったく異なる。東方においては、神と人間のあいだにこうした相互関係が存在するという認識に対して、西方よりはるかに寛容な態度で接していた。寛容というよりも、イエス・キリストが神であることを決して認めようとしないイスラーム、ユダヤ教に周囲を囲まれた東方正教会は、イエス・キリストが神であり同時に人間であるというキリスト教の本質を護るために、強固な意志をもって寛容たらざるを得なかった。その寛容さは、切羽詰まったものだったのだ。その必死さから、本稿が扱って

³⁶⁾ *Архиепископ Сергей*. Полный месяцеслов Востока. Владимир, 1901. Т. 2. С. 522.

³⁷⁾ *Архиепископ Сергей*. Полный месяцеслов. Т. 2. С. 393-394.

³⁸⁾ 「ロゴスの受肉」（小高毅訳）宮本久雄編『中世思想原典集成 2 盛期ギリシア教父』平凡社、1992年、134頁。

³⁹⁾ エックハルト // 『世界大百科事典 Ver. 10』日立デジタル平凡社、1998年。

きた神の御母に対する冒瀆的な誹謗が信仰のなかに忍びこむわずかな隙間が生まれた。したがって、「信仰」と「冒瀆」は一見してそう見えるほど、互いに他を排斥しているわけではない。盛り場では、冒瀆的な言辭とパフォーマンスで神の御母を誹謗し、侮辱し、嘲笑していたこのスカマロフが、人目から離れた奥まった自らの小部屋に戻ると、神の御母のアイコンをまえにして滂沱と涙を流しながら、「生活の糧を得るためとはいえ自分は冒瀆の罪を犯しました。悔い改めますから地獄の責め苦からはお救いください」と必死に自らの罪の赦しを祈っていたとしても、筆者はまったく不思議を感じない。いやむしろそう考えたほうが、映画の一シーンのようで面白いではないか。『スカマローフについての講話』もこうしたことは織り込みずみだったのではないかと。むしろ悔い改めの時をもつことを拒絶したからこそ、スカマロフは罰を受けたのである。

キリスト教信仰箇条（カルケドン）の一つの突出した表現である「神化（テオーシス）」の認識は、今日にいたるまで、正教思想のなかで脈々と息づいているように思われる。このような宗教的感覚のなかでは、「人間が神になる」というのは、可能性と義務の両方を含む考え方となる。イエス・キリストにおいて神が人間になったという恩寵によって、わずかながらも人間が神になる可能性が生じ、その可能性を、全知全霊をもって追求することのなかに、人間の救済の唯一の可能性が存在している。神の恩寵の偉大さを感じた人間が、神になろうという意味をもつからこそ、テオーシスは実現する。すなわち、自らには罪がないにもかかわらず人類の救済のために「自らの意志で」十字架にかかったイエス・キリストの真似びとして、「自分の意志で」「自分も」究極の自己犠牲に殉じた「神」になる意志をもつからこそ、「恩寵」が訪れて人間には神になる可能性が開かれる。その結果、人間は人間を超えた巨大な何ものかになる。そして同時に、人間は人間というものを超えて卑小で腐りきったものにもなり得るのだ。たとえば、『カラマーゾフの兄弟』のスメルジャコフのように、神を冷笑して神から背を背け、卑劣な行いを卑劣とも思わぬ人間が現れてきても何の不思議もない。ドストエフスキイの天才は、神と人間のあいだのこの矛盾と相克を見て見ぬふりをして通り過ぎることはできなかった。

テオーシスのうら面を垣間見たところで、メビウスの輪をたどるように、ふたたびテオーシスのおもて面へと戻りたい。12世紀末の逸脱の物語作者、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の作者たちの一人であるポリカルプにも、確実にこのテオーシスの認識があった。『キエフ洞窟修道院聖者列伝』所収の『第27話アガピット』において、ポリカルプは次のように述べる。

彼らはここで肉のことに気をかけず、肉体のない人間として地上の事柄を見くだして、この世のすべてを糞のように見なし、キリストにのみ達しようとしていたからです。彼らはキリストだけを愛し、自らをキリストの愛だけにしっかりと結びつけ、自らの意志を完全にキリストに委ねて、キリストからテオーシス（神化）を受け取ることになったのです。⁽⁴⁰⁾

また、「第34話スピリドンとアリンペイ」でも次のように述べている。

うちに偽りをもたず、心に奸智をいだかぬ素朴な魂はすべて神聖なるものである。そのような魂の持ち主は神に対しても人間に対しても真実なる人間であり、神に対して罪を犯すことができない。それ以上に、それを望まない。なぜなら、そのような人は神の器であり、自らの魂、身体、心を明るく照らす聖霊の住処だからである。⁽⁴¹⁾

ここで述べられた「聖霊の住処」というのは、『コリントの信徒への手紙一』を踏まえた表現である。そこでは、次のように述べられている。

あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちのうちに住んでいることを知らないのですか。

(40) 三浦清美『キエフ洞窟修道院聖者列伝』松籟社、2021年、244頁。

(41) 三浦清美『キエフ洞窟修道院聖者列伝』松籟社、2021年、303-305頁。

神の神殿を壊す者がいれば、神はその人を滅ぼされるでしょう。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なのです。⁽⁴²⁾

しかし、主に結びつく者は主と一つの霊となるのです。みだらな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて体の外にあります。しかし、みだらな行いをする者は、自分の体に対して罪を犯しているのです。知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。⁽⁴³⁾

人間は、聖霊の宿る神殿である。いや人間は、聖霊の宿る神殿であるべきである。神ならぬ人間としてはここまで言うのが精いっぱいではないのか？ このふつうに考えて不可能な、得がたい、稀有で理想的な瞬間が訪れたときにはじめて、聖霊が人間の身体に宿り、イエス・キリストの究極の真似びであるテオシスが実現する。これが実現するためには、気の遠くなるような人間の憧憬と努力と忍耐が必要である。アントン・チェーホフの書簡の言葉を伊東静雄があらためて歌い上げた秧鶏のように⁽⁴⁴⁾、繁殖の場所と越冬の場所とのあいだの全路を歩いて移動するような、憧憬と努力と忍耐こそが 필요한のであろう。その過程で、キリストに真似ぶという努力そのものが、不完全な人間というものに避けられない誤謬を、場合によってはとてつもない規模で惹起することがあり得るとしても…。

『キエフ洞窟修道院聖者列伝』に収められた年代記作者ネストルによる『フェオドーシイ伝』でも、キリストが生身の、現身の人間として歩いた地を、自分の足で踏みしめたいと熱望して、若きフェオドーシイはパレスチナへの巡礼に出かけることを発願する。ロシア正教は、フェオドーシイの場合のように、イエス・キリストにおいて「神が人間になった」ということへの感動に貫かれているように思われる。東方正教を貫く神の御母マリアに対する熱烈な崇敬にも、同様なことが言えるのではないだろうか。

周知のとおり、西欧でも聖母マリアは民衆の篤い信仰の対象だった。心理学者で独創的な宗教思想家でもあったC・G・ユングは、「民衆の間には、取りなし手である女性の仲保者がついに聖なる三位一体の中に位置を占め、『天の宮における天の女王である花嫁として』迎え入れられてほしいという願いが、深く浸透していたのである」⁽⁴⁵⁾と述べているが、民衆のあいだでさかんであった聖母信仰をローマ教皇庁が公式に認めるのは、1950年の「童貞聖マリア被昇天」の教義の公布を待たなくてはならない。ユングは、ローマ教皇によるこの教義の公布を「宗教改革以来のもっとも重要な宗教的事件」⁽⁴⁶⁾であると評価している。ナチスの台頭がようやく終わったあとに、カトリック教会は千数百年の歴史をもつマリア崇敬を公認したのだった。

イエス・キリストに対しても聖母マリアに対しても、どこかよそよそしさを感じさせる西欧教会と異なり、

(42) 『コリントの信徒への手紙一』3章16-17節。以下、聖書からの引用は新共同訳に拠る。

(43) 『コリントの信徒への手紙一』6章17-20節。

(44) 1888年3月6日チェーホフのプレシチャーエフあての手紙。「ひどく寒いですね。でも、かわいそうな鳥たちはもうロシアに向けて飛び立とうとしている頃でしょう。郷愁と祖国への愛の犠牲となる鳥たちは何百万に及ぶでしょうか。そのなかのどれだけの鳥が道の途上で凍え死ぬのでしょうか。3月と4月あたりに鳥たちがどれほどの苦しみに耐え抜いて祖国にたどり着くことか。このことを詩人たちが知っていたならば、彼らはとくに鳥たちのことを歌い上げていたでしょうに。…あなたは全路を飛ばずに歩いてくるクイナの状態に身を置いてみるとよいと思います。あるいは、凍え死なないようにするためだけに生きたまま人間の手に落ちてしまう野生のガチョウ（雁のことか？—三浦注）の立場に。…この世に生きるということはつらいことです。」（三浦訳）Чехов А.П. Письма. Т. 2. 1888. М., 1975. С.211；「秧鶏のゆく道の上に、匂ひのいい朝風は要らない／レース雲もいらぬ 霧がためらつてゐるので厨房のやうに温かいことが知れた 栗の矮林を宿にした夜は 反落葉にたまった美しい露を 秧鶏はね酒にして吞んでしまふ／波のとほい白つばい湖邊で そ處がいかにもアット・ホームな雁と道づれになるのを秧鶏は好かない 強ひるやうに哀れげな昔語は ちぐはぐな合槌できくのは骨折れるので／まもなく秧鶏は僕の庭にくるだらう そしてこの傳記作者を残して 來るときのやうに去るだらう」「秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る」伊東静雄『伊東静雄詩集』新潮文庫、1994年、32-33頁。

(45) C・G・ユング『ヨブへの答え』（林道義訳）みすず書房、1988年、144頁。

(46) 上掲書147頁。

東方正教会は民衆だけではなく中枢に近い教会活動家も、神の御母マリアに対しても、マリアによって人間となったイエス・キリストに対しても、はるかに近い距離で接していたように思われる。本稿で見てきた物語、壁画、説教のように、そのような親しい関係性のなかで、聖なる神の御母への性的含意をもつ冒瀆的言辞やパフォーマンスが生まれてきた。このことは、信仰と冒瀆とが決して互いに他を排除する関係ではなかったことを物語っているように思われる。